

同窓会報で佐藤宏子先生の訃報を知りました。とても胸に迫りました。先生には、たしか、テキストに、“Gift from the Sea”（『海からの贈り物』アン・リンドバーグ著）を教えて頂いた記憶がありますが、その授業だけだったと思います。清楚で、柔らかい雰囲気、優しい微笑を絶やさない穏やかな先生でした。卒業して何十年か後、女性学の公開講座に参加した折、佐藤先生の優しい笑顔に再び接することができて、本当に嬉しかったことを覚えています。

先生はアメリカのウイラ・キャザー（1873－1947）を研究され、著書、訳書など多数あります。『キャザー 美の祭司』という作家論をさっそく読んでみました。ウイラ・キャザーの生涯、背景、作品に肉薄し、丹念に解説しておられる評論に圧倒されました。続いて、訳書の『マイ・アントニーア』（ウイラ・キャザー著）を読みました。とても面白かったです。

語り手の回想という形で、物語は展開していきます。描かれている世界は 19 世紀後半の開拓期のアメリカです。キャザーが少女時代を過ごしたアメリカ中西部ネブラスカ州には 1860 年代、自営農地法により開拓民として多くの人々が移民として入植しました。キャザーの家族もそうでした。キャザーはそこで体験した大自然、移民の暮らし、アメリカ人となった人々の姿をこの本に描いています。

厳しく、美しい自然、広大な大草原、耕される荒地、放牧される家畜、言葉や文化の違う人々。開拓する苦難とそれによって自分の土地となる希望。その中で、ボヘミアからの移民家族の娘、アントニーアを描いています。彼女は愛する家族を支えるために労働し、大地の恵みを楽しみ、喜ぶ。小さな命を尊び、生かされている幸せを思う存分表現する、そんな少女です。語り手にとってアントニーアは「僕の」アントニーアであり、どれだけ愛してやまない女性であるか伝えているのです。



ネブラスカ州中部の開拓者、1886 年撮影

彼女を描くことによって、アメリカ開拓の歴史、アメリカの大地が描かれ、アメリカの文化が作り上げられていく姿が浮かび上がってくるのです。開拓民として入植するのは貧しいヨーロッパからの移民ですが、信仰、身分制、封建制などの伝統のしがらみを持ちつつも、それらから自由になり、解放されて、主体的に生きようとする人々がアメリカを作っていきます。

TV ドラマ「大草原の小さな家」も開拓民の幼い娘達を主人公にしていますが、『マイ・アントニーア』では、少女期から働く者でありながら、恋愛、性、妊娠、結婚、出産、育児、家事といった様々な体験をしつつ、生き生きとした感性、たくましさ、しなやかさを持って、自立して生きる女性が主人公です。作者の女性への愛、敬意が感じられます。

本を開くと新しい世界が広がるという喜びを味わえます。今回、私はアメリカの開拓期の現場が文学的に表現されているキャザーの世界に飛び込むことができました。日本人ならば、樋口一葉が同時代。佐藤宏子先生は、女性作家による、女性像の表現を通して、新しい女性像を私たちに紹介して下さったのではないかと、思いました。